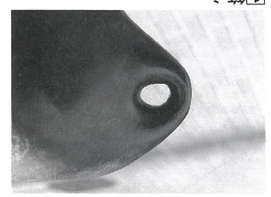
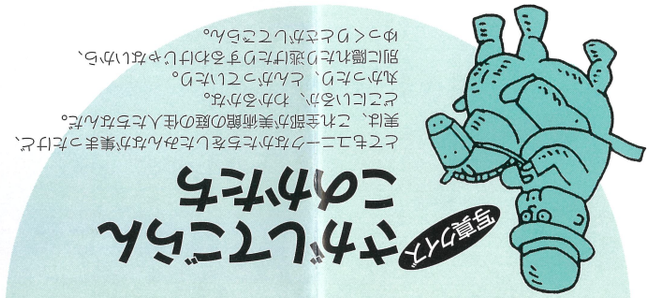


1番え



写真パズル サカ!してごらん このかたち

どれも二一ワかたちをしたみんなが集まったけど、実は、これ全部が美術館の庭の住人たちなんだ。どこにいるか、わかるかな。

えらんだら、とんがっていたら、別に隠れたり逃げたりするわけじゃないから、ゆっくりとさがしてごらん。

8番え

2番え

4番え

6番え

9番え

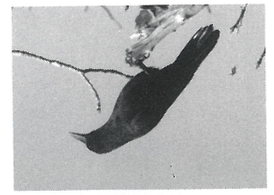
3番え

5番え

7番え

10番え

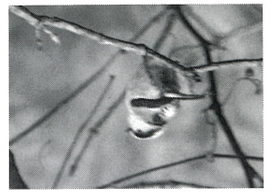
庭の野鳥たち



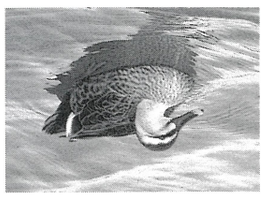
ハシボソガラス（スズメ目カラス科）
最も普通なカラス。年中いる留鳥。この地域の名だたる営巣（えいそう）する場所で子育てをすると、ヒバロヒレと識別される。ヒバロヒレは、ヒバロヒレ、ヒバロヒレ、ヒバロヒレ。

ハクセキレイ（スズメ目セキレイ科）
最近、市街地で増加しているセキレイ。頭、ことに額のあたりが白いことで、セグロセキレイと識別される。ヒバロヒレは、川岸の崖（がけ）に営巣するケヤマヒメヒメヒレとは異なり、冬期は各所で越冬中で、チチ、チチ、ツピいう特有の声を聞かせている。留鳥。

ツグミ（スズメ目ヒタキ科ツグミ亜科）
冬鳥として渡来して、この付近では芝生や植え込みで採餌している。ヒヨドリより尾は短い。体は太い。胸を張った立ち姿勢で止まる。10月の末頃、静かな夜空に、ツグミのツ、ツツ、ツツ、ツツの声が響こえる。



エナガ（スズメ目エナガ科）
尾の長い小鳥。体はスズメより小さい。山地や丘陵地で繁殖したり群れが移動してくるので、秋から春までの間に見ることがある。ジュリジュリいう鳴き声からであろう、地方によっては「ジュリリ」が来たよ」などと言っている。



カルガモ（カモ目カモ科）
留の北側の広瀬川には、いろいろな水鳥が生息するが、カルガモは冬の代表である。個体数は、秋から冬に増加する。広瀬川には、川岸の崖（がけ）に営巣するケヤマヒメヒメなども見する。冬期には、都鳥（みやこどり）として知られるユリカモメも出現し、餌の上空も飛ぶ。ケッケッケッと鳴く。留鳥。

キジ（キジ目キジ科）
日本特産の鳥で、1947年に国鳥に指定されている。脚にけづめを持ち、尾は長く多数の黒帯がある。新緑の頃、ケン、ケンの声が響かれる。

庭の緑たち

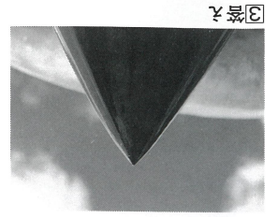
ヒマラヤスギ（ヒマラヤ：針葉樹）
長さ約10センチメートルの赤褐色長楕円形の果実がなる。主に庭園樹としてよく使われる。ヒマラヤ原産のマツ科の常緑高木。

メタセコイヤ（スギ科：落葉針葉樹）
円錐形の整った樹形が美しい。日本を始めとする北半球各地で、中生代から中新世の化石として知られていたが、後に原生種のアケボノスギが発見された。

スズラン（ユリ科：多年草）
北部の山野に多くみかける。腕蒸、白色ベルのつぼ状の小花を総状につけ、芳香が豊かで美しい。普通に栽培されるのは日ーロッパ原産のドイツスズランがきい。美術館の庭にあるスズラン は、川崎町富岡中学校の生徒たちが植えてくれたもの。

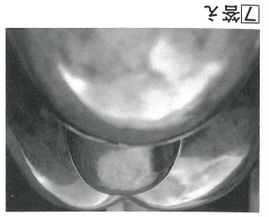
ケンポナシ（クロウメモドキ科）
初夏、小枝の先や葉の付け根に散房状に淡緑色、五弁の小花を咲かせる。秋に球形の果実を付け、食べることができる。美術館が建つ以前から昔からこの風景を眺めている。

ミヤギノハギ（マメ科：落葉広葉樹）
宮城県の県花として親しまれている落葉低木。晩夏に紅紫色や白い花をつける、自然に素朴な感じの花木。

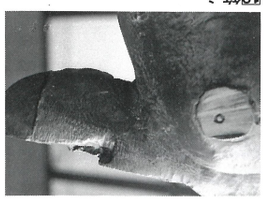


3番え

5番え



7番え



10番え

「時の旅人」1981（昭和56年）
鉄・アルミニウム
高さ1,100㎝
新宮 晋（しんぐう すすむ）
1937〜

七本の回転軸を持つ大きな風車です。微妙な均衡を保つ構造体が、風を捕らえたり、逃がしたりしながら、移ろう季節の中で、風の方向や強弱に応じて様々な動きを見せてくれます。

風を目で見ることはできません。私たちは、草木のゆらめきや、水面にたつさざなみで風を知ります。この作品は、いわば折々の風の表情を視覚に伝える装置です。

館内ガイド

●創作室
見た後で作ってみると、それはもっと良く見えてくる。いろいろな物を、いろいろな方法で作ることができる部屋です。作るのはもちろん、もっと良く見る見方も含めて、スタッフが相談に乗ってくれます。

●造形遊技室
お母さんやお父さんといっしょに、絵本や手作り積み木で遊べます。

●図書室
美術図書、展示会図録、ビデオ作品などを自由にご覧になれます。

●ブックショップ
展示会図録、絵ハガキ、ポスター、美術関係図書などを販売しています。

●レストラン「サリックス」
中庭に面した開放的なレストラン。

●コーヒーショップ「ゼルコバ」
白い大理石に囲まれた明るいスタンドショップ。

宮城県美術館
仙台市青葉区川内元支倉34-1
TEL. 022-221-2111

●発行／宮城県美術館
●協力／小野泰正（岩手大学教授・宮城県自然環境保全審議会委員）
●イラスト／樽井純生　●印刷／㈱ユーメディア

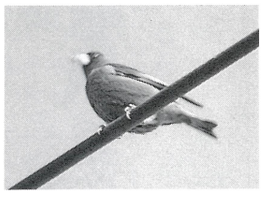
THE MIYAGI MUSEUM OF ART

ようこそ、アリスの庭へ。

こんにちは、アートの中の自然たち。

美術館の庭の住人は、ユーモラスでかわいい彫刻たちだけではありません。にぎやかにさえずる野鳥たちも、静かにたたずむ緑たちも、みんな主人公なのです。

ヒヨドリ（スズメ目ヒヨドリ科）
ピイーヨ、ピイーヨと鳴く。スマートで、スズメよりはかなり大きな小鳥。驚くとピイッと鋭く鳴く。椿や桜の花の蜜を好んで吸い、秋以降はよく木の実を食べる。それでシロダモなどの木の種子を運ぶことになる。留鳥。



カワラヒワ（スズメ目アトリ科）
緑色っぽい、スズメより頭などが太い感じの小鳥。翼の黄色が目立つ。キリリコロロと鳴き、春には樹上でピイーとかゲーイと聞こえる声で鳴く。よく地上に降りて餌をとる。留鳥。

トビ（タカ目タカ科）
ワシタカ類の中でもっともポピュラーな種。青葉山や西公園には冬期に特に個体数が多い。この付近は、トビの行動域である。早春からピーピョロヒョロヒョロと鳴き、飛翔中にも鳴く。留鳥。

ムクドリ（スズメ目ムクドリ科）
人家付近の樹木などに群れをなし、果物や昆虫を食べる。夜には大集団で共同のねぐらを作って眠る。灰色でくちばしと脚が黄色をしている。キュキッ・キュリリリッと澄んだ声で繁殖期には鳴く。

留鳥（りゅうちょう）：季節による移動をしないで1年中だいたい同じ場所に住む鳥。

シジュウカラ（スズメ目シジュウカラ科）
頭と、胸から腹部中央が黒く、頬（ほお）が白いスズメ大の小鳥。黒いネクタイをしているように見える。ポピュラーな留鳥。ツーピーツーピーとさえずる。地鳴きはいろいろだが、ジュクジュクという声がまじる。敷地まわりでも活動する。冬季には、他のカラ類やコゲラの混じるカラ類混群（こんぐん）として行動することが多い。

キジバト（ハト目ハト科）
いわゆる“やまばと”。デデッポッポウと鳴く。

庭の緑たち

ケヤキ（ニレ科：落葉広葉樹）
宮城県の県木として昭和41年に指定された。日本の落葉広葉樹の中では最も大木になるもののひとつで、仙台市内の並木の美しさは第一級。

クヌギ（ブナ科：落葉広葉樹）
初夏、葉の間に黄褐色の花を穂状につける。果実は「オカメドングリ」ともいい、大きな球状のクリにも似たイガがある。樹皮や葉は染料・薬として用いられる。

コブシ（モクレン科：落葉広葉樹）
早春、葉に先だってにぎりこぶしを思わせる蕾（つぼみ）を付け、芳香ある白色六弁の大花を開く。果実は秋に熟し開裂、白糸で赤い種子を釣り上げる。食べると辛い。

ナナカマド（バラ科：落葉広葉樹）
花は小型白色五弁で、七月に群がり咲く。果実は球形で、秋に葉と共に鮮やかに赤く色づき、落葉後も残る。七度かまどに入れても燃えないという俗説がある。

イロハモミジ（カエデ科：落葉広葉樹）
カエデの中で最も多く植栽されており、主木の添え植えとして利用されることが多い。秋は紅葉が美しく、冬は日本的で繊細な小枝模様を見せてくれる。